

回想と感謝

川 窪 啓 資

「人は老いてレトロスペクチフの境界に入る」と鷗外はその短編「なかじきり」に書いているが、私にも人並みに定年の日が迫ってきた。そして一体自分は今までの人生で何をしてきたかという想いが脳裏に去来する。

私は初め麗澤高校の英語の教師になり、いまでは麗澤大学大学院で比較文明学を講じている。何故そういう道を辿ったのか、そもそも教師とか学者になる気があったのか、という問いである。人生には多くの偶然、出会い、目に見えぬ導きがあるということが、73歳の今感ずることである。若いころは人生には無限の可能性があると夢想していたが、人は誰でもある時点で一つの道を進むしかないと悟るのである。

私の父は土佐の長谷川英信流という居合いを愛好し、自宅には30数本の日本刀を収蔵し、時々端座しては、抜けば玉散る刀身に打粉を打っていた姿が目につく。私は土佐高二年生の時は毎晩素振りを百本、二百本、三百本と増やし、一晩2千本を振り、その後減らしていったが、合計一年間に十万本振った。そういうわけで東京大学文科二類に昭和29年4月に入ったとき、真っ先に東大剣道部に入部したのである。当時は「剣を取ったら日本一の」赤銅鈴之助の歌が流行していた。私の夢は剣道の達人になることであつた。なにも剣道の達人になるのに、東大に入ることも無かろうと思うであろうが、一高、東大剣道部は昭和の剣聖と謳われた持田盛二や有名な剣客と関係もち、なんと私までが持田範士に稽古をつけていただいたこともある。今でも続いている剣道部雑誌『赤銅』の初代編集長に私はなり、題字は防衛庁長官であつた大先輩木村篤太郎先生から頂いた。

昭和29年10月11日、私の人生にとって一大転機となることが起きた。そ

れはモラロジー（道徳科学）研究所二代所長廣池千英先生のお宅をなんの紹介状も持たず一人でお伺いしたことである。既に高校卒業までに父母の学んでいた『道徳科学の概要』（廣池千英講述）を何回も繰り返し読んでいたが、「...であるのでご御座ります」という言葉がよく出てくるが、どうしてそういう結論になるのか、私には分からなかった。そこでその本の講述者である廣池千英という先生にお聞きすれば分かるであろうと思って出かけた。その日、東京は小雨の降る日であつたが、目白駅から下落合まで地図をみながら歩いて行った。道路から玉砂利をしいた玄関に至る道をいき、呼び鈴を押した。するとお出かけの直前だったらしい、紫色の着物式のレインコートを召された気品のある女性が現れた。私は観音様かと思った。私は勇気を奮って東大文科一年の川窪啓資という者ですが、廣池千英先生にモラロジーについて教えていただきたく参りました、と申し上げると、主人は千葉の学園に行っています、とお答えになった。大奥様はソト身を翻して奥に入られ、黒色の羊羹二切れと紅茶を持って来てくださった。私は紅茶を飲む事ができたが羊羹は食べられなかった。お宅を辞するとき大奥様は懐紙で羊羹を包み私のポケットに入れて下さった。大奥様（つまり廣池三代子様）から学園までの道をうかがい、一週間ほどしてそこで山本恒次先生にお目にかかり、またもや慈悲の権化に出会った感じがした。このような出会いによって、「鹿の溪水をしたひ喘ぐがごとく」（詩篇 xlii,1）道を求めて私は学園に参った者である。これは昭和29年（1954）10月のことで、いまから55年前のことである。これが私のその後の活動の原動力となった。

振返ってみると、学祖廣池千九郎博士には直接お目にかかることは出来なかったが、二代所長廣池千英先生、三代所長廣池千太郎先生。四代所長廣池幹堂先生につながる精神伝統のご教導によって今日をいたしていることを、感謝をもって想起する。

私は東大の英文科と米国のDuke大学大学院の英文科を出てMA(修士)となつたので、英文を専攻するのがまともなコースであろう。Dukeではホーソーン学の大家Arlin Turner教授のご指導を受けたので、それが基礎となりホーソーン研究の英文著書(Nathaniel Hawthorne: His Approach to Reality and Art, xiii+298 pp. 2003)を出し文学博士になり、また日本ホーソーン協会の会長にもなった。ところが高校時代に鶴見祐輔の『新英雄待望論』を読み、トイン

ビーの『歴史の研究』を知った。時はまだ敗戦の傷跡が残っていた昭和27年のころであった。鶴見先生は『歴史の研究』のなかの「困難の恩恵」のところを引用し「日本は必ず興る」と力説されていた。わたしはそれを読み、感奮興起し、将来トインビーを読みたいものだと思った。それも昭和20年7月3日の夜から4日の朝にかけて高知市はB29,50機の空襲にあった。小学4年生であった私はシュルシュル、ダーンという音をたてながら落下する焼夷弾と紅蓮の焰に包まれた家々を見ながら家族と共に逃げていった体験があるからである。

そのトインビーが昭和31(1956)11月27日年私が東大の3年のとき東大に講演のためこられた。その時の私の英語力ではトインビーに直接面会を求める勇氣は持ち合わせていなかった。その後も少しずつトインビーを読み続けた。(その翌年はインドのネルー首相も来学された。)その後私が麗澤大学講師のとき、廣池千太郎学長がトインビーにモラロジーを紹介されるということで、私は通訳として、ロンドンのトインビーのお宅まで随行させて頂いた。そのことについては、拙著『トインビーから比較文明へ』pp. 255-258に書かせていただいているのでご参照いただきたい。

帰国後のある夜突然山本新という方から電話があり私と一緒に毎月一晩『図説歴史の研究』を一章ずつ講義してほしいという要請があった。それは30分余続いた。山本博士は日本におけるトインビー研究の第一人者であることをあとで知った。10章からはじめて最終章の54章まで、山本先生と交代で、講義していったが、私が講義するときも先生はわたしの横にお座りになっていた。『図説』と『完訳歴史の研究』(全25巻)の該当部分を読み準備したが、これは本当に勉強になった。

私が約50年親しんできたNathaniel HawthorneとArnold J. Toynbeeの関係は私の中ではどうなっているか。これは直接的には関係はない。しかし勉強を続けているうちに、両者ともReality(実在)の問題と関わっていることに気がついて来た。トインビーの学問の性格には絶えず実在を探究する姿勢が強く表れている。「人間事象の分析的・分類比較研究として始まって、途中で形而上史学(meta-history)研究に変わった。」(『完訳歴史の研究』第22巻、419頁、原著ではvol. 12、p. 229) 実在の表現として現象がある。(現象の背後に実在をみる。)そしてホーソーンの文学もそうである。前記拙著題名の後半は

His Approach to Reality and Art となっていることからもお分かりいただけるように、Realityという言葉がホーソーン研究においても自然に浮かんできたのである。これはトインビーがmetahistoryに力点が移ってからそうであるが、ホーソーンの文学もそういう姿勢がつよい。そして文学は言語による芸術である。

先ほど鶴見先生の文章の中に「困難の恩恵」とあったが、それが私のトインビーに引きつけられたkeywordであるということ述べたが、それは『完訳歴史の研究』の第3巻および第4巻、原著の*A Study of History*, vol. IIに詳しく述べられているところである。困難といっても適度な刺激が必要であって、強すぎても弱すぎてもよくないと言っている。困難は5つのタイプの挑戦として分析されている。すなわち困難な土地、新しい土地、打撃、圧力、制裁である。トインビーの文章は他のところもそうであるが、人を勇気づけるものがある。

初めに廣池大奥様、続いて山本恒次先生との出会いによってこの学園に入ったことをのべたが、東大2年生の時学園創立者の広池千九郎博士の『道徳科学の論文』(第6版6冊本)を買い、夢中になって読んだ。漢文は土佐中から土佐高の6年間、および東大の2年間の8年間授業で学び、さらに自分でも、四書(大学、中庸、論語、孟子)はよんでいたもので、『道徳科学の論文』の漢文の所も飛ばさず全部読んでいった。本書は実に私の学問の基礎になった。そういう状態でトインビーの『完訳歴史の研究』の全25巻、原著では*A Study of History* 全12巻を中心とする世界に遭遇したのである。『道徳科学の論文』の初版は1928年であり、それに使われた参考文献は和漢書260、洋書462件(必ずしも冊数ではない)。科学的立証をするために使用された洋書の最新のものでも1923年ぐらいで、文献が古くなっていることは言うまでもない。著者みずから言われているように、絶えず新しい研究を入れていくことが必要である。しかし基礎的な原型(Archetype)は不変である。それは聖人の教説は2千年、3千年の風雪に耐えており、モラロジーはそれに基づいているからである。トインビーがいうキリスト教、大乘仏教、イスラム教、ヒンズー教、ゾロアスター教などの高等宗教はその歴史的、風土的伝統の相違によって多様であるが、愛とか慈悲という点では一致が見られる事をトイン

ビーは解明している。その点広池千九郎博士は、天照大御神、孔子、仏陀、イエス・キリスト、ソクラテスの5大道德系統に共通一貫する道德原理を最高道德と名付け、その根本精神は慈悲寛大自己反省であり、自我没却神意同化し神意の実現をはかるように説いていることを考え合わせると、トインビーと広池千九郎とは軌を一にしているといえる。

さてその後国際比較文明学会と関係が出来、1994年から毎年世界各地で開催される学会に出かけ発表してきた。最初に参加したダブリンの学会は特に思い出深い。その直前はトインビーさんの三男のローレンスさん後夫妻のいらっしゃる Ampleforth でお世話になり、そこからヨークへ出て、ヨークから小型飛行機でダブリン空港に着いた。タクシーの運転手は親切で陽気、歌まで歌いだすという具合で、初めからダブリンが好きになってしまった。日本人の商社マンで海外駐在地として一番住みたいところは、ここダブリンだという統計を見た事がある。会場のダブリン大学には地元のアイルランドのほか英、米、ポーランド、ロシア、チェコスロバキア、ドイツ、フランス、スイス、ベルギー、南アフリカ、インド、ニュージーランド、オーストラリア、その他から学者が集まっていたが、別に申し合わせをした訳でもないのに使用言語は英語であった。イギリスが産業革命に成功して世界中に植民地を作っていくうちに、英語が世界語になっていった事を思い知らされたのである。ここアイルランドにも、英語とは全く違うアイルランド語があったのだ。つい百数十年前まではダブリン地方とアルスター植民地以外のアイルランドのすべての地方ではアイルランド語は農民のあいだで広く話されていたのである。1845年から1849年まで5年間、アイルランドの主食である馬鈴薯の大飢饉があった。そこで約160万人のアイルランド人がアメリカに移民した。彼らが里帰りしたとき、英語を話したため、また19世紀にアイルランドで英語が教育の手段として用いられたため、ほとんどすべてのアイルランド人がアイルランド語を忘れ、英語を話すようになったのである。自国語を喪失したのである。私はダブリン市に2つあるアイルランド語研究会へ行こうとしたが時間がなくて断念した。あらたに英語でアイルランド文学を創造した James Joyce とか W.B. Yeats が如何に尊敬されているか、わたしはダブリンに来て初めて実感として知った。こんなことを長々と書く暇はないので、以下国際比較文明学会歴代会長名と開催場所を列挙するに留める。

Pitirim A. Sorokin, 1964-71 トインビーは参加したが会長にはならなかった。

Othmar Anderle, 1964-71
Benjamin Nelson, 1971-77
Vytautas Kavolis, 1977-83
Matthew Melko, 1983-86
Michael Palencia-Roth, 1986-92
Roger W. Wescott, 1992-95
伊東俊太郎, 1995-98
Wayne Bledsoe, 1998-2004
Lee Daniel Snyder, 2004-07
Andrew Targowski, 2007-2010

開催場所

1961: Salzburg, Austria
1964: Salzburg, Austria
1971: Philadelphia, with the American Academy for the Advancement of Science
1972: Washington, DC, with the AAAS
1974: Boston University, with the Society for Cross-Cultural Research
1975: University of Pittsburgh
1976: University of Pennsylvania, Philadelphia
1977: Bradford Junior College, Bradford, MA
1978: The University of Milwaukee
1979: California State University, Northridge
1980: Syracuse University, NY
1981: Indiana University, Bloomington
1982: The University of Pittsburgh
1983: The State University of New York at Buffalo
1984: Appalachian State University, Boone, NC
1985: Antioch College, Yellow Springs, OH
1986: The College of Santa Fe, NM
1987: Ohio University, Athens, OH
1988: Hampton University, Hampton, VA
1989: The University of California, Berkeley

1990: The University of Illinois, Urbana
1991: Santo Domingo, Dominican Republic
1992: Eastern Kentucky University, Richmond
1994: University College, Dublin, Ireland
1995: Wright State University, Dayton, OH
1996: California Polytechnical Institute, Pomona, with the World History Association
1997: Brigham Young University, Provo, UT
1998: 麗澤大学, Kashiwa, Chiba, Japan
1999: St. Louis, MO
2000: The University of Alabama, Mobile
2001: Rutgers University, Newark
2002: Frenchman's Cove, Port Antonio, Jamaica
2003: St. Petersburg, Russia, with four Russian associations
2004: The University of Alaska, Fairbanks
2005: The University of St. Thomas, St. Paul, MN
2006: Paris, France, with the Ecole Pratique des Hautes Etudes
2007: ASILOMAR, Monterey, California
2008: New Brunswick, Canada
2009: Kalamazo

比較文明学は 1) 比較 2) 総合性 3) 国際性 4) 世界平和 5) 専門的方法
論がなければならないことを、この学会から学ぶことが出来よう。

私は以上述べたように、モラロジー、トインビー、そしてホーソーンを中心として、まことに不十分ながら研究しながら定年の日を迎えることになった。

謝辞

Duke 大学の Arlin Turner 博士には透徹した学識と温雅なる人格によって、
まだすべてが新鮮であった私の感覚と学問を陶冶してくださったご恩は忘れ
がたい。その間 Matthew Melko, Roger Williams Wescott, Palencia-Roth, 伊東俊

太郎、Andrew Targowski など歴代の会長その他碩学と個人的にも親しくなり、
特に伊東先生とは身近に大学者の風格に接することが出来ることは、私の大
なる喜びである。

ただ如何に多くの恩恵を受けてきたか感じる。今後少しでも報恩をしていか
なければならないと思う。

いろいろまだ書きたいこともあるが、いまは時間がない。ただ如何に多く
の恩恵を受けてきたか感じる。今後少しでも報恩をしていかなければならな
いと思う。